

〔翻 訳〕

## ヤーコブ・グリムの言語学者カール・ラッハマン宛の手紙 (1838年8月24日－8月31日)

— G. W. F. ヘーゲルの「歴史哲学」の最終講義 (1830年冬学期) の  
Jan Ackersdijck による講義筆記録のオリジナル・テキストの  
解読のための基礎資料—

Jacob Grimm  
尼 寺 義 弘 [訳]

### はじめに

訳者は、この15年間、オランダの学者Jan Ackersdijck (1790-1861) によるG. W. F. ヘーゲルの「歴史哲学」の最終講義(1830/31年冬学期)の講義筆記録のオリジナル・テキストの解読に取り組んできました。このテキストは、原文A：493頁、原文B：47頁からなるものです。原文Bの解読作業はとくに難航を極めました。ここにようやく出版の運びとなりました。[下記、訳者注1参照]。

J.アッケルスダイクの手になるこの手稿の解読にあたり、訳者は、言語学上の問題に逢着せざるをえませんでした。それは、今日、正書法として確立している、ドイツ語の書式の基本法則との関連です。

言語は生き物であり、それは盛者必衰の理をつねに示すものです。訳者の問題点を、端的に言えば、今日の正書法でヘーゲルの生身の講義をはたして聴講できるか、という問いであります。さらに言うならば、今日の正書法に基いて、約200年前にさかのぼるところの筆記録を捌いてよいか、という問題です。

訳者の基本視角は、ヘーゲルをしてヘーゲルを語らしめる、ということです。すなわちヘーゲルが学生たちに語りかけ、生きているその講義を、可能な限り、その筆記されたままの姿で再現できるのではないか、という視角です。この視角より「歴史哲学」の講義録の解読作業に勤しんで参りました。

ここに訳出するJ.グリムの手紙は、訳者のこの視角を根拠づけるものです。

“Göttingen Sieben”で、周知のように、この手紙の書かれた1838年は、「ゲッティンゲン七教授事件」が起きた翌年のことです。ハノーファー国王エルンスト・アウグストによるゲッティンゲン大学からの即時追放(1837年12月14日、教授職の免職と3日以内に国外退去)という厳しい試練のなか、グリム兄弟は大ドイツ語辞典の刊行にむけて心血を注ぎます。そして、長文のこの手紙において、当時はまだ確立していなかったドイツ語の正しい書き方について多くの示唆が与えられています。

訳者は、この手紙が掲載されている著作“Briefwechsel der Brüder Jacob und Wilhelm Grimm mit Karl Lachmann II 1927 Jena”[訳注2]を十数年前Ruhr大学Bochumの言語学部図書館で手にすることができました。この書は、ヤーコブおよびヴィルヘルムからなるグリム兄弟の、言語学者カール・ラッハマン[訳注3]との書簡のやり取りを収録しています。

以下において訳出するこの手紙[195. Von Jacob Grimm.]は、同書S. 684.の下段より、同書S. 691.の上段まで8頁にわたって印刷されています。

日付けは、手紙の初めに“Cassel 24 aug. 1838.”と記され、手紙の末尾に“am 31 aug. 1838.”と記されています。つまり、日付けが二度にわたって書かれています。J.グリムが、この手紙を書き始めた日付け

と、書き終えた日付けと解することができるでしょう。

この手紙は、十三の段落から成り立っています。訳者は、第一節から第十三節までとしました。また各節は、それぞれに長文、短文があります。

例えば、第九節は、S. 688.の文頭からS. 690.の6行目まで、84行におよぶ長文です。訳者は、こうした長文の場合には、適宜、改行しています。また、第七節および第十一節は、それぞれ3行からなる短文です。

さらに言えば、一つの文章が、すなわちあるピリオドから、つぎのピリオドまで、7行という長きにわたる場合があります。翻訳にあたり、適宜、ピリオドを打っています。

さらに「注」につきましては、各節ごとに記しています。そして原書にある14箇所の注は、例えば、(原注1)として( )マル括弧で略記しています。

また、訳者による注は、例えば、[訳注1]として[ ]各括弧で略記しています。

この手紙は歴史的な文献であることから、発表するまでに十年余という長時間を要しました。さらに翻訳にあたり、訳者は多くのドイツの友人の方々のご協力をえました。

ボッフムにあるノルトライン-ヴェストファーレン州州立言語学研究所図書館Frau Dr. Diana Kott, ギリシャ語・ラテン語の教師Herr Philipp Nölker (Münster), ルーア大学で日本の中世史を学ぶHerr Benn Schmidtに厚く御礼申し上げます。なかでも、ベン・シュミット氏とのあいだでくりかえされたメールによる往復書簡は、コロナ禍のなか、この翻訳に大いに力を与えていただいたことを書き記します。

訳注による人物紹介等々につきましては、“Meyers Grosses Taschen Lexikon in 25 Bänden, 7., neu bearbeitete. Auflage 1999”はじめ内外の、そして各分野の種々の辞典類を参照しました。

翻訳にあたり、参照しました文献を末尾に記します。これらの文献収集において、広島大学高等教育開発センター情報調査室、京都大学、天理大学はじめ各地の大学付属図書館および樫原市立図書館はじめ各地の公立図書館にお世話になりましたことを深謝し、厚く御礼申し上げます。

## 訳 注

- [1] Georg Wilhelm Friedrich Hegel, Philosophie der Geschichte. Mitschriften der letzten Vorlesungen von Jan Ackersdijck, 1830/31 (Wintersemester), Originaltext A und B, Herausgegeben von Yoshihiro Niji, Mai 2021 Westdeutscher Universitätsverlag Bochum.
- [2] Briefwechsel der Brüder Jacob und Wilhelm Grimm mit Karl Lachmann, im Auftrage und mit Unterstützung der Preussischen Akademie der Wissenschaften, Herausgegeben von Albert Leitzmann, mit einer Einleitung von Konrad Burdach, II, 1927, Verlag der Frommannschen Buchhandlung (Walter Biedermann) Jena.
- [3] Karl Lachmann (1793-1851) 19世紀の古典言語学者。言語学において「ラッハマンの方法」として著名である。

S. 684.

## 195. ヤーコプ・グリム より

カッセル 1838年8月24日

Oct. 2021 ヤーコプ・グリムの言語学者カール・ラッハマン宛の手紙 (1838年8月24日－8月31日)

### 第一節

最愛の友よ、私は、君のことをしばしば考えています。とりわけ君がクレンツェスの早すぎる死（原注1）によって被った厳しい状況、それ以来そうです。そして君に、その苦しみのほかになお新たな心配事という重荷を背負い込ませたことです。とはいえかかる務めは同時にふたたび慰められます。

ねえ、君、哀れむべき婦人に、彼女の苛酷な運命に、私および我々すべての者が、心から寄り添えるかい。前年の出会い以来、その出会いはそれ自体すでに悲哀の始まりでした。それは、我々が双方ともに確かなあこがれによってそこになお存在し、我々からそのこと以来、奪い取られていたものを回想する以外にありえないことです。

### 原注

(1) Klenzes クレンツェスの死は、7月14日です。ラッハマンはクレンツェスと同居していました。

### 第二節

私は、君に私のことについて何を書けばよろしいでしょうか。私は、君が手紙を恐れていることに、非常に気遣っています。その手紙は苦痛なものを含んでいますし、そして君になおまた平穏な時間をもつことを妨げうるのです。

君が我々に明らかにした実直な憐憫の情ののちには、感謝の念が、私には、すでに、私の感情および私の見解に君を煩わせないことが課されているといえるでしょう。君はもうこれ以上は、私の感情および私の見解に自分を煩わせることはありません。

君は私とは全く異なった境遇と地位にあるのですから、決してそれらをただちに受け入れることはできません。私には今や全く自然的に見えるもの、そこに君はまずは作想的に身をおいてみる必要があります。(S. 685)

### 第三節

私は2か月間にわたって外国を旅してきました。そしておもにキッシンゲン、ライプティヒ、そしてイエーナに滞在しました。そこでは私はしばしば不愉快で、面倒で、孤独な気持ちになることはありましたが、しかしまた喜びと高揚というより軽やかな時が流れました。

私は生まれつき新たな知り合いおよび新たな社交について努力するということはありませんでした。その私が、とはいえ、多くの端然とした、そして善良な人々に出会いました。

ライプティヒでは、なかんずくサロモン・ヒルチェル [1] およびハウプト [2] が、旧知の誠実な友が、性に合っていました。イエーナではシュバルツ (教会顧問) [3] がそうでしたし、フロマン [4] もまたそ

うでした。そしてイエーナには、私がキッシンゲンをあとして旅立ったところのダールマン一家 [5] もいました。

エアランゲンの市民のなかではラウマー一家 [6] とデーデルライン [7] がとりわけ友好的でした。ライプティヒのほとんどの教授たちが、だんだんと私の知り合いになりました。

### 訳 注

- [1] Salomon Hirzel (1804-1877) : 出版社ヴァイトマン書店の共同所有者の一人。もう一人の共同所有者は、カール・ライマー。大ドイツ語辞典はライプティヒのこのヒルツェル出版社より第一巻が1853年に刊行された。
- [2] Haupt, Moriz (1808-1874) : モーリッツ・ハウプトは、J. グリムが追放されたとき、29歳のライプティヒ大学の講師であったが、免職になったグリム兄弟を救うべく、彼ら兄弟を『大ドイツ語辞典』の編集者にすえた。のちにK. ラッハマン教授の跡を受け、ベルリン大学ドイツ文学教授。
- [3] Schwarz, Eduard (1803-1870) : 神学教授, 教会顧問, 教区監督 [プロテスタント]。
- [4] Frommann, Friedrich Johannes (1797-1886) : 出版者, 書籍商, 政治家。
- [5] Dahlmann, Friedrich Christoph (1785-1860) : 歴史学者, 政治家。ゲッティンゲン大学教授。J. グリムの受難の盟友。1837年、ハノーファー王国の国王となったエルンスト・アウグストは、1833年に制定された憲法を一方向的に破棄し、そして旧憲法を有効と宣言しました。ダールマンはじめ、七名の教授がこの政策に異議の申し立てを行いました。グリム兄弟も名を連ねていました。国王は怒り、直ちに、七名の教授の免職と首謀者と見られた、ダールマン、ヤーコブ・グリム、ゲルヴィーヌスの三教授の三日以内の国外退去を命じたのです。「ゲッティンゲン大学七教授事件」として知られています。
- [6] Raumer, Karl Georg von (1783-1865) : 地質学者, 地理学者, 教育学者。
- [7] Döderlein, Johann Ludwig Christoph Wilhelm (1791-1863) : 古典学者。

### 第四節

我々の計画と希望は今や移ろいやすいものとなっています。君が知っているように、我々はライプティヒへ向かおうとしていました。まさにこの地が私の旅の本来の目標でした。そしてダールマンと再会したいという熱望のみが、私をキッシンゲンへと向かわせたのです。

しかし私がさきにヘルマーネン [1] を訪れたときは、様子がすでに違っていました。そして彼はまさにドレスデンで起こった出来事の知らせについて怒って話しました。その知らせはダールマンのあらゆる希望のほとんどを奪い去るものでした。

我々は、何を求めて、家財道具と子供たちを連れて、よその、慣れない、埃(ほこり)だらけの、高価な都市へ移っていかうとするのでしょうか、[その必要はありません]。その地は、家財道具よりももっと僅かなものしか、我々を必要とはしていないのです。

つぎのことはもっとも自然的で、そしてもっとも勧められることのように見えました。カッセルの私の弟(原注1)の家を我々は快諾しています。まったく心地の良い避難所です。そこは彼と彼の妻を心から喜ばせるものです。そこはまたゲッティンゲンから近いということも、それがいくつかの長所をもっているのです。

二、三のことが、ここは、私には不快なことと思われるかもしれませんが、しかし我々が選りすぐる余地

Oct. 2021 ヤーコプ・グリムの言語学者カール・ラッハマン宛の手紙 (1838年8月24日－8月31日)

はありません。そしていずれの他の土地も、自分の土地に対して文句をつけることでしょう。

小都市イエーナならば、私にはとても気に入っているのですが、とはいえダールマンもまたさらに先へ進めて、リューベックへ引越そうとしています。まさに今や、彼はふたたび他のことを望んでいるように見えます。そして冬のあいだあそこ [キッシンゲン] ですごそうとしています。

#### 原 注

(1) Ludwig Grimm : [(1790-1863) グリム一家の六男, カッセルの美術学校教授。免職後のグリム兄弟は, カッセルのこの弟ルードヴィヒのもとで暮らすこととなります。]

#### 訳 注

[1] Hermannen, Wilhelm Konrad, (1812-1890) 文献学者。

### 第五節

かくしてミカエル祭 [9月29日] に, ヴィルヘルム [1] とドルトヒェン [2] と子供たちが, ついに再びここ [カッセル] において私と一緒にになります。私はふたたび秩序と平穏をえています。そして私は本と書類をもちや欠かさない様になります。

というのは全てのものが, そこ [ゲッティンゲン] に残されてきたからです。私はふたたび規則的に仕事をするようになります。

私は起こりうるすべてのことに勇気をもって臨(のぞ)みます。そして, 私はできるかぎり, 私の心を軽やかにしようと思ひます。如何なる外的な窮迫も, 我々の心を動かすことはできません。

#### 訳 注

[1] Wilhelm Grimm : ヴィルヘルム・グリム (1786-1859) グリム一家の三男。「グリム兄弟の弟」。

[2] Dortchen (ドルトヒェン) : Henriette Dorothea Grimm (1793-1867) W. Grimm の妻, 四人の子供の母。カッセルで「太陽薬局」を営む Wild 家の五女。グリム兄弟は, この姉妹たちから最初にメルヘンの聞き書きをしました。

### 第六節

ベティーナ [1] がちかく我々を訪ねる, と伝えてきました。私は彼女が来なければ良いがなあ, と思っています。

彼女の我々への温かい, そして純粋な関心が, 私を心地よくし, そしてほとんどすべての彼女の手紙が, 慰める力と元気づける力とをもっていました。そのことに私は心から彼女に感謝しています。

しかし彼女は私に, 我々の仕事を熱くさせすぎ, そして間断なきものとさせすぎます。我々は, 如何に振る舞うべきか, について堅固で断固としています。しかし彼女の計画と (686) 意図が, 極端に激しやすい

もの、および冒険的なものへと反れていきます。彼女は我々の業績と能力を高く買いすぎています。

我々は今や辞書を作るための本気の意志と、辞書を作りたいという喜びをもっています。この状態に我々は留まり続けるつもりです。そしてできる限り、もはやけっして、この状態に反論させないつもりです。

我々が係争中の訴訟に勝てば(それはまさにありそうもないことですが、しかしつねに可能性はあるのです)、給与の未払金が破滅を免れさせてくれます。そして進んでいる作業はだんだんと金を稼ぎ始めるのです。

再任用の見通しはありません。半年前には私はそのように考えることはなかったのですが、今はそう思います。

君たちの友が我々のために失ったところのいずれの言葉も、私にはひどく心の痛む残念なことです。どうか直ちに、少なくとも今、そのことを止めてください。

私はプロイセンへ行くことを、我々の誠実な仕事を裏切った国へ行くことを嫌悪しています。そして彼の国のちっぽけな、愚かしい不安のなかで、不法なことがもみ消され、そしてそのもみ消されたことが過剰に癒されたことを意図する、そうした国を嫌悪しています。不法なことはいずれふたたび曝けだされるにちがひありません。

もしもハノーファーの王[2]が、彼の強硬策を断念するようにドイツ議会によって命ぜられたとすれば、[しかし、実は、命じられていませんでした] 一体、何が起きたことでしょうか。そうすれば、平穏がえられ、そして全ドイツが堅実さと信頼をえたことでしょうか。現在のところ不安と真理の抑圧がつづいているのですが。

この柔弱な貴族の原理は最後にはどこへ向かおうとするのでしょうか。昨日、ゲルハルト教授[3]が私を訪れました。彼は、ハノーファー王妃に近い親族のゆえにということから、プロイセンの立場を弁解しました。

あらゆるドイツの貴族の血統は近い親族にあるので、誰も他の者が恐れることをする必要はないでしょう、と言いました。

しかし、もしも王が不法という評価をうけとるならば、親族であることは何の役にも立たないのです。人はそこに政治的な危険のみを見るところです。

そしてあらゆる王の官僚たちは、もっとも公平でもっとも知識のある王の健康を祝して乾杯します、王はかかる決まりに同意しています！

信じられないほどの心の狭さと利己心が、プロイセンの官吏を支配しているにちがひありません。そして私はプロイセンの官吏の近くに行かない、ということで満足しています。

Oct. 2021 ヤーコブ・グリムの言語学者カール・ラッハマン宛の手紙 (1838年8月24日－8月31日)

人は、我々七人の者を悪と見るのです。それは自明の理です。というのは我々がいなければ、全てのことがハノーファーでは沈黙するでしょう。そして我々が登場します。もしも市民のすべてがその義務を果たすならば、あるいは、たいていの者だけでもそうするならば、我々は長きにわたってひっそりと背後にたたずんでいたでしょうに。

ある場合には他の場合と同様に我々は即自的に同一です。

なぜプロイセン全体でこの案件に関して声が大きくならなかったのでしょうか。

アイヒホルン [4]、彼はドイツ法のあらゆる古い時期をある独裁者の自信によって無視しています。この問題について彼は、中世の時代とはちがって、全てのことについて、十倍も明確であるはずなのに、今日の法の問題についての見解を避けています。そして彼は、もしももっと強圧的に、見解の催促を被ったら、詭弁によって、自分の意見をおおい隠そうとします。というのは彼が、とはいえ国民の自由および名誉のみならず、彼の友、彼の弟子、彼の先達を代表しなければならないからなのです。

しかし私は我々に反対する彼の政治的な見解を、そしてその見解に基づいて彼が法の問題に関する彼の意見を形成することを恐れています。(S. 687.)

#### 訳注

- [1] Bettine Brentano, von Arnim (1785-1859): Clemens Brentanoの妹にして、Achim von Arnim (1781-1831)の妻。グリム童話集の出版に尽力する。この書の初版第一巻は、彼女とその息子にささげられた。ベッティナーは、免職後のグリム兄弟を救うべく、プロイセンの皇太子に手紙を書き、亡命の身であるグリム兄弟がベルリン大学で教授職をえられるように全力を尽くしました。なお、ザヴィニー教授夫人であるGunda von Savigny (1780-1863)は、ベッティナーの姉である。
- [2] König von Hannover: Ernst Augst (1771-1851): 在位 (1837-51)、前王 Wilhelm 四世の弟にして、大英帝国のヴィクトリア女王の伯父。王位に就くや、直ちに、現行憲法の破棄を画策し、国民に対して強権政治を発動しました。
- [3] Gerhard, Friedrich Wilhelm Eduard (1795-1867): 考古学者。
- [4] Eichhorn, Karl Friedrich (1781-1854): 法学者。『国家および法の歴史』全四巻 (1808-1823)の著者。ドイツ法の歴史学派の創立者の一人。ヤーコブは、パリ時代 (1814-1815)の仕事をとおして知り合い、のちのプロイセンの文部大臣アイヒホルンより、1840年にベルリン大学への招聘状を受け取ります。

#### 第七節

このことについては、もう、それで十分でしょう。私には私を悩ませている他の事柄があります。そして貴方は忌々しい公的な案件においてよりも、より容易に助言することができます。その忌々しい公的な案件は、その案件のなかに引きずり込まれている人の魂のみが占めています。

#### 第八節

ディートリッヒ社 [出版業者]の人たちは [1]、文法書の新版のことで私を苦しめます。その文法書の第一部はすでに、数年来、不足しています。その不足は商売にとって不利なことです。彼らは今やまさに

第一部をふたたび印刷させたいのですね。そしてそのことについてハウプトもまた新たに助言しているのです。

しかし私は新版について決定することはできません。私は、16年ののちに、公衆にふたたび同じ本を、私が与えることをしてはなりません。音韻と語形変化の理論はあらゆる点において片付けられるべきです。

私自身は当然ののちに学びました。そして他の者が事柄を整理し、そして敷衍しました。書物のなかで私は論駁したいとは思はないのですが、しかし有益なことすべてについて考慮したく思います。

グラーフ [2] は彼の辞書のなかにかかなりの異論と文法上の付論をもたらしています。彼はたぶんその異論と付論を私に委ねたほうがいいでしょう。彼はその異論と付論によって彼の本を傷つけることとなります。なぜならその異論と付論は誤りなしとはしないからです。

レーベ [3] による、私の第四巻の批評に (原注 1)、私は腹を立てています。それは、私が今や暇をえざるをえないであろう、という意地悪い批評のほか、未熟であるという非難にあります。それに私は腹を立てています。

私は、統語論のこの試みは、私の音韻論と形態論と同様に、丹念に仕上げたものであり、そして独自に仕上げたものであると考えています。

私が *ein opus supererogatum* nachträge すでに出来上がった仕事に、補遺としてつけ加えた方が良くだろうと思うことは、人は非難するよりも褒める方がよい、ということです。全てを仕上げうためには、なおそれほど長い時間は必要とはしないでしょう。

課題は、解決されるべき非常に多くのことがありましたが、そのための基礎はすでにできあがっており、今やさらに構築してよいということです。

アルファベットは、それが辞書のなかで見いだされたいずれの補遺にも、そして同時にその箇所を指し示していること、あるいは、また辞書のなかではじめて実行された計画を補正すること、それは非常に容易なことです。しかし全てのことを最初から、かかる実行によって一度に成し遂げることは困難なことです。

今や私は、即座に、その箇所に四度にわたり補遺を与えたいのです。というのは、私には仕上げにおいて、しばしば典拠および例証がきわめて少なく、それが見つけられないからなのです、そして私はゴート語の、古代高地ドイツ語の、中世高地ドイツ語の辞書のなかで、その典拠および例証の一片をもっていないからなのです。

私は、多くの邪魔のもとで、そして全体の分野を見渡すということのなかで、私ができたことよりも (原注 2)、ウルフィラ (原注 3) のためにその余暇の時間全体をささげる、ウルフィラ [4] の二人の発行者 [5] が、事態をいくぶんよく理解していることを、私は感謝の念を込めて認めます。



Oct. 2021 ヤーコプ・グリムの言語学者カール・ラッハマン宛の手紙 (1838年8月24日－8月31日)

私が、また個々の維持しえないおよび冒険的な着想を混ぜ合わせる、ということを知ってくれるならば、この混ぜ合わせるということが、今や、私の仕事のやり方であるのです。この着想なしということでは、私も他の長所なしで済まざるをえないでしょう。

私は本来的にはまず統語論を完成したいのです。つぎに新版へと進みたいのです。とはいえ出版者の根拠が重大なことに見えます。

貴方は何を考えているのですか。そして第一巻のいずれの個所をあなたの見解に従って、とりわけ加工することが必要なのですか。(S. 688.)

### 原 注

- (1) 『イエナー一般文芸新聞』1838年1401頁。
- (2) 原文S. 687. 第8節, 下より7行目, als was ich … の“was”が、横線により消去されている。
- (3) ガベレンツとレーベによって編集され、発行されたウルフィラの『聖書』。同書, 673頁, 訳注[4], 参照。

### 訳 注

- [1] Dietrichs : ゲッティンゲンの出版社ディートリッヒ社。『グリム童話集』第三版, 出版, 1838年。訳文は、「ディートリッヒ社の人たち」としました。
- [2] Graff, Eberhard Gottlieb (1780–1841) : Althochdeutscher Sprachschatz oder Wörterbuch der althochdeutschen Sprache, 1 Band, Berlin 1834.
- [3] Löbe, August Julius (1805–1900) : 『ウルフィラ聖書』の校訂本を出版。[5] Gabelenz 参照。
- [4] Ulfila (311–383) : ゴート人司教。ギリシャ語より, ゲルマン語の一つの源流とされるゴート語に聖書を翻訳しました。
- [5] Gabelenz, Hans Conon von (1807–1874) : ゴート語を研究し, 『ウルフィラ聖書』の校訂本を August Julius Löbe と共著で出版しました。  
Ulfilas, veteris et novi testamenti, versionis gothicae. Leipzig 1843.

## 第九節

さてドイツ語の辞典という遠大な計画が割って入ってきました。その計画は、私には最初は妨害するものとして現れましたが、今や好ましいものとなっています。その計画は我々を支えること、そして我々の独立性を保証することができます。そして仕事が進み始め、上手く進んでいけば、私はさらに名誉あるすべての職を断念します。そしてこの作品に私の全力を捧げます。

ライマー [1] は私に無断で貴方の助力をあからさまに検討しました。もしも貴方が我々のためにレッシング [2] からの抜粋を仕上げたいということであれば、全く感謝して認めるべきことです。私にはもちろん貴方が、背後に陣取って、他の者よりもいっそう熱く、我々の今日の窮迫にさいして、どうすれば我々を助けることができるのか、ということを目論んでいることが思い浮かびます。

さてその計画に関して言えば、その計画は仕上げの段階にあたり、はじめてまったく正確に展開し始めることができるでしょう。しかし抜粋の基準のためには、とはいえ、すぐに計画の基本線が描かれていなければなりません。私の仕事は、今や二つのことに係かっています。素材におよび取り扱い方に。

辞書は中世高地ドイツ語が終わりを告げるところの、すなわちルター[3]からゲーテ[4]までの新高地ドイツ語を含むつもりです。

実は、1300年から1520年のあいだに、いろいろな言語についての史料がそのまま残っています。それらの史料はもっともふさわしいやり方で、とりわけそれほど大きくはない本において、中世高地ドイツ語辞典の補遺として取り扱うことができます。とはいえそれらの史料は新高地ドイツ語辞典とはほとんど関係をもつものではありません。

我々はかくしてそこから出て、生きている高地ドイツ語 *sprache* の範囲全体を収集するのみならず、その言葉 *wörter* の理由があろうと、なかろうと、古くなっているところの、16, 17, 18世紀の全ての *wörter* 言葉を取り上げます。

もしも誰かが、古くなっていない、そして今日妥当している言葉 *wörter* だけを与えたいと考えるならば、それはあまりに狭苦しい目標を立てて、そしてほとんどモードの、あるいは、繊細な措辞の辞書を求めることになるでしょう。

今日すでに使われていない表現と意味があります。それはなおレッシングとヴィーランド[5]において妥当していました。いわんやそれ以前の言葉が[もっと多く使われなくなっていたのです]。

しかしながら、私が思うに、ルターの時代以来の美と力についての全ての言葉 *wörter* が、適当な時期にふたたび取りあげられ、そして新たに使用されることになるべきでしょう。それは辞書の成果と働きと考えられるべきことです。作家は辞書から完全な利用可能な言葉 *sprache* の富を察知し学ぶのです。

例えば、私にとって、シラー[6]のような多くの最近の著述家たちが(ゲーテではなくて、またレッシングでもなくて)、彼らの新たな発見を除けば、彼らは、ある程度のことですが、語彙は貧弱であり、そして我々の言葉 *sprache* [ドイツ語]にはあまり能力のないものに見えます。それはジャン・ポール[7]のような思想性豊かな著者にも妥当します。彼は[ドイツ語の深い意味が分からないので]普通の言葉 *wörtern* で何とかやりくりしています。

出来立ての表現は、シラー、ヴォス[8]、クロプシュトック[9]において大量にあります。それらは合成語および派生語であり、わずかな単純語 *seltne simplicia* あるいはわずかな意義をもつ語 *seltne bedeutungen* よりもはるかに多いのです。

かくしてシュレーゲル兄弟[10]、あるいは、ティーク[11]の作品において、会話のなかでは出なかったであろうところの、多くのことが姿を現わすということはほとんどないでしょう。

一度、その他の言葉の材料 *wortstof* が揃ったら、さらにウーランド[12]、リッケルト[13]、プラーテン[14]の作品をさがしてみても、彼らの作品のなかからつけ加えなければならない[言葉]はほとんどないでしょう。

しかし17世紀および(S. 689)16世紀は、とてつもない多くのことを提供しています。ローヘンシュタイ

Oct. 2021 ヤーコブ・グリムの言語学者カール・ラッハマン宛の手紙 (1838年8月24日－8月31日)

ン [15] のような、再び読まれることのない、読みたくもない著者たちも、非常に良い言葉 wörter を、そして使用可能な表現 redensarten を利用したこともあります。そのことについて主たる注意が払われるべきです。

文法では私にはエトナー [16] の医学の著作 (原注 1) が、17世紀の日常語 umgangssprache の理解のためにしばしば役立っていました。

16世紀では抜粋がいっそう難しくなってきます。というのはより多くの古くなった形式がすでに存在しているからですが、しかしルターの聖書、それは、彼の言葉 sprache がもっとも気品に満ちて、そしてもっとも思慮深く統括しています。

そのルターの聖書とは別に、彼の全ての作品が、デ・ヴェテ [17] の編集にもとづく手紙が (原注 2)、そしてその他の作品が、ヴィテンヴェルク版、あるいは、イエーナ版の全集 (原注 3) にもとづき、読み通されねばなりません。そして引用するのがとてもむずかしい個々のパンフレットが読み通されねばなりません。

フィシュアルト [18] は特別に注目されねばなりません。彼において無理やりに試みられた、言語 sprache に図太くつけ加えられたことを、現実に言語 [ドイツ語] のなかに現存するものから、区別しなければなりません。

フィシュアルトは現実に言語 [ドイツ語] のなかに現存する言葉も巧みに利用しています。両者の境界を見つけ出すのはいつも容易なことではないでしょう。(原注 4)

モイゼバッハ [19] の検索はどこまで進んでいるのでしょうか。彼はその検索を提供してくれるのでしょうか。そして確かに彼が集めたところの、他のものは提供してくれるのでしょうか。

これまでのところ、分担はわずかしかが為されていません。とはいえそれは素早く為されねばなりません。ハウプトは H. ザックス [20] を引き受けました。Dr. クレー [21] はゲーテを、Dr. ライザー [22] はルターを、少なくとも部分的に引き受けました。

貴方はレッシングを引き受けます。私の聴講生の一人、チェレのゲーデッケ [23] はシラー、オーピツ [24] あるいはグリフィウス [25] を希望しています。私は他の人に著書を検索する協力を求めました。

さらなる分担者を貴方は思いつきますか。シュテティーン のヴェルマン [26] はどうですか。マクデブルクのヴィッゲルト [27] はどうですか。

公的な勧誘は目的に合っているのでしょうか。

あらゆる抜粋は16折判の紙片に書かれねばなりません。私は、便利にその紙片に書かれた抜粋を編成することができます。いずれの紙片にも正確な引用の言葉 wort のみが書かれ、かくして可能な限り最上の版が用いられ、そして序説の最初にそのことが述べられます。

抜粹する者は記録すべき言葉 wörter を、そしてそれを文章全体の関連のなかにおき、十度およびそれ以上に、紙片に記帳することを厭うてはなりません。

編集者はこれらの言葉 wörter を確実に、そして調べることなく理解しえなければなりません、もしも彼が十の例証のうち、たとえば二例を手元に留めておき、そしてその他を捨て去るとするならば。

方言 dialecten からは何ものも直接には取り入れられません。ただ間接にのみ取り入れられます。良い著述家が方言から自分のものとしたこと、例えばオーピツとローガウ [28] はシュレージエンの kürmeln キュルメルン [29] を使っています。キュルメルンは今や古くなっていますが、しかし辞書のなかでは欠けてはならないものです。(原注5)

というのは、辞書はあらゆる高地ドイツ語の詩人を理解するために、参照されるべきものであるからです。かかる詩人は一度だけ方言の言葉 provinzialismus を用いており、そのことによって方言を文章語としたのです。H. ザックスがそうでした、というのは彼は世俗的で大衆向きの詩人でしたから、しかしいくつかの表現は単なる方言として無視させられねばならないのです。(S. 690.)

しかし職人のみが知っていて、著述家は誰も知らない技術的な言葉 wörtern はいかがですか。そしてその技術的な言葉は、とはいえ全くの方言の言葉ではないのです。狩人の、山間部の人々の、官庁の言葉 sprache はいかがですか。

品の良くない言葉 obscenen について、著述家が感動のなかで、歌を作るために一度も欠かすことのできないもの、そうしたものを良い喜劇作家は必要とします。それらの言葉は辞書のなかに入るこ

とが許されます。

### 原 注

- (1) J. Grimm und W. Grimm, Deutsches Wörterbuch Band 1 1854. S. LXXIII.  
ヤーコブ・グリム、ヴィルヘルム・グリム『ドイツ語辞典』第1巻、1854年、LXXIII頁、参照。
- (2) デ・ヴェテ (Wilhelm Martin Leberecht de Wette) は、ルターの手紙を編集しました。  
Dr. Martin Luthers Briefe, Sendschreiben und Bedenken vollständig aus den verschiedenen Ausgaben seiner Werke und Briefe, aus andern Büchern und noch unbenutzten Handschriften gesammelt, kritisch und historisch bearbeitet von Wilhelm Martin Leberecht de Wette, Berlin: Reimer, 1825-1856.
- (3) ヴィテンベルク版とイエーナ版は、二つのルターの作品の編集を指しています。そのタイトルは、編集巻によって違っています。  
Wittenberger Lutherausgabe, Wittenberg 1539-61.  
Jenaer Lutherausgabe, Jena 1556-1558.
- (4) 原文 S. 689. 13行目 … sein. in wie … の “in” が横線により削除されている。
- (5) J. und W. Grimm Deutsches Wörterbuch. Band 5, Leipzig: Hirzel 1873, 2813.  
ヤーコブ・グリム、ヴィルヘルム・グリム『ドイツ語辞典』第5巻、1873年、2813列、参照。

### 訳 注

- [1] Reimer, Karl August (1801-1858): カール・アウグスト・ライマー。ヴァイトマン書店の共同所有者の一人。父 G. R. ライマーが、当時、一流のこの書店を手にいれ、息子カールと娘婿 Salomon Hirzel に譲渡しました。『グリム童話集』初版、第一巻、1812年、第二巻、1815年。再版、第一巻、第二巻、1819年、第三巻、1822年。再版まで、ベルリンのライマー社より出版。

Oct. 2021 ヤーコブ・グリムの言語学者カール・ラッハマン宛の手紙 (1838年8月24日－8月31日)

- [2] Lessing, Gotthold Ephraim (1729-1781): ドイツの啓蒙期の戯曲作家。世界市民の意識を土台に、権威への批判、合理主義、人類の進歩をすすめる。『ラオコーン』(1766), 『賢者ナターン』(1779)。
- [3] Luther, Martin (1483-1546): ドイツの宗教改革運動の指導者。『95箇条』(1517)による贖宥状販売の否定。破門威嚇勅書の焼却(1520)。『ドイツ国民のキリスト教貴族に与う』、『教会のバビロン幽囚について』、『キリスト者の自由』(同年)。  
ルターは、1521年、ヴァルトブルク城に籠り、思索と著述に専念する。ここで有名な新約聖書のドイツ語訳が行われた。エラスムスのギリシア語テキスト(1516年)をもとにしたこの聖書は、後にドイツ語の発達に大きな影響を与えるほど広く読まれることになる。J. グリムはこの独訳を高く評価している。
- [4] Göthe, Johann Wolfgang von (1749-1832): ドイツの疾風怒濤時代と言われる文芸運動の中心人物。『若きヴェルテルの悩み』(1774), 『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』(1796), 『詩と真実』(1811-33), 『ファウスト』(1831)等。ドイツ人の理想とした教養人。彼は生涯にわたり、世界の昔話に強い関心をもちつづけ、グリム兄弟とも交流があった。
- [5] Wieland, Christoph Martin (1733-1813): 自伝的作品 Agathon (1766-67), 韻律文ロマンス Oberon (1780) の作者。
- [6] Schiller, Johann Christoph Friedrich von (1759-1805): 自由への渴望を強くし、『群盗』(1781), 『たくみと恋』(1784)。『30年戦争史』(1791)では歴史を理念的にとらえ、自由の発展を強調する。『ドン・カルロス』(1787), 『オルレアン少女』(1801)。『ヴィルヘルム・テル』によって古典主義を完成。文芸理論は、『素朴文学と感傷文学について』(1796)。
- [7] Jean Paul (1763-1825) 本名 Johann Paul Friedrich Richter: ヴァイマルにて、ヘルダーと交流。『巨人』(1802)の作者。
- [8] Voß, Johann Heinrich (1751-1826): ホメロスの作品など、ギリシア・ローマ時代の古典をドイツ語に翻訳。詩人。
- [9] Klopstock, Friedrich Gottlieb (1724-1813): ドイツ語の詩言語 Poesiesprache の刷新者。押韻叙事詩 Messias『救世主』に、同時代人は感動する。Über Sprache und Dichtkunst, drei Bände 1779-80。
- [10] August Wilhelm von Schlegel (1767-1845), Friedrich von Schlegel (1772-1829): ドイツ初期ロマン派を代表する文学者。兄・シュレーゲルは、シェイクスピアの翻訳、インド思想の研究で、弟・シュレーゲルは生の哲学で著名である。弟の妻 Dorothea Friederike Schlegel (1763-1845) は女流作家。
- [11] Tieck, Ludwig (1773-1853): ドイツロマン派の作家、『ノヴェレン』(1852-1854年)。
- [12] Uhland, Ludwig (1787-1862): Alte hoch- und niederdeutsche Volkslieder (1844-45, 2 Bde.) ドイツの詩人で、言語学者。
- [13] Rückert, Friedrich (1788-1866): Morgenländische Sagen und Geschichten (Oriental Myths and Poems) (1837), Brahmanische Erzählungen (Brahmin Stories) (1839). エアランゲンおよびベルリン大学オリエント学教授。
- [14] Platen, August Graf von (1796-1835): A. von Platen, Gesammelte Werke (i.e. Collected works) (1839). ドイツの詩人で劇作家。
- [15] Lohenstein, Daniel Casper von Arminius (1635-1683): “Großmütiger Feldherr Arminius”, comprising around 3000 pages, 1689-90. シレジアの男爵で、ブレスラウの法律顧問で外交官。小説家。
- [16] Ettner, Johann Christoph (1654-1724): Des getreuen Eckharts entlauffener Chymicus. Augsburg 1696. 医者で著述家。
- [17] de Wette, Wilhelm Martin Leberecht (1780-1849): ドイツの神学者で、聖書学者。ルター書簡集 全6巻 出版 1825-1856 Berlin.
- [18] Fischart, Johann (1540-1591): Floeh Haz Weiber Traz 1573. Neue künstliche Figuren biblischer Historien (1576). 風刺作者にして評論家。
- [19] Meusebach, Karl Hartwig Gregor Freiherr von (1781-1847): 法律家にして文献学者、そして蔵書家。彼は、Fischartの著作を集めていたので、この文のRegisterは、Fischartの著作物の目録を指していると思量されます。
- [20] Sachs, Hans (1494-1576): ドイツの職匠歌人、劇作家、靴屋の親方。グリム童話のいくつかはザックス作品の翻案である。
- [21] Klee, Julius Ludwig (1807-67): 言語学者にして教師。J. グリムは、ドイツ語辞典の序言(Bd. 1.1854. Sp. LXVII)において、彼を最も熱心で、最も慧眼な協力者として褒めている。
- [22] Leyser, Hermann (Julius Titus) (1811-1843): 文献家、ライプティヒの図書館助手。
- [23] Gödeke, Karl (1814-1887): J. グリムの弟子、文芸史家、ゲッティンゲン大学教授。  
Deutschlands Dichter von 1813 bis 1843 (1844).  
Grundriß zur Geschichte der deutschen Literatur 1910.
- [24] Opitz von Boberfel [d] t (1597-1639): シュレージエン詩人学派の創設者にして、ドイツ詩人、そしてバロックおよび後期ヒューマニズムの理論家。  
Buch von der Deutschen Poeterey, Breslau u.a., 1624.

- [25] Gryphius, Andreas (1616-1664): シュレージエン出自のバロック詩人。“An Gott den Heiligen Geist”, 1637.  
[26] Wellmann, (Franz) Albert (Ferdinand) (1805-1851): シュテティーンのギムナジウム教師。  
[27] Wiggert, Friedrich (1791-1871): ドイツ語教師にして、言語研究者および歴史家。マクデブルクのドームギムナジウム校長。  
[28] Logau, Georg von (1495-1553): シュレージエンの貴族の出自、人文主義者、書物の愛好者にして新ラテン語詩人。  
*In laudem Catharinae Aquiliae et Ge. Loxani coniugis carmen; 1534.*  
Epigrammata, Krakau 1540.  
[29] Kürmeln: キュルメルン。シュレージエン [Oder河, 上・中流一帯地方] の“kürmeln - lallen” [幼児言葉: 回らぬ舌で訳の分からないことをしゃべること]。

## 第十節

もしもこれらすべての資料の入手が困難となれば、これらの資料の取り扱いも困難で容易ならざるものとなります。あらゆる言葉と意味が、必要な場合には、十分に一覧に供され、そしてグラーフ Graff の呪われた Bo. 5 (原注 1) [ポエティウス 5] よりも、より正確な引用によって、そのことが例証されるべきです。

私はここではつぎの点のみに触れます。

1. 辞書の見出し語の各々の言葉 wort の頭文字は、大文字で、あるいは、その言葉全体を大文字で書きますか。そうでなければ、いたるところで、ラテン文字の書き方となります。そして固有名詞以外のところでは小文字が用いられます。
2. アーデルンク [2] の定義に代わって、単にラテン語の翻訳を入れますか、(括弧に入れるか、あるいは、イタリック体でか)。翻訳が不可能であるか、あるいは、翻訳が不適当である場合には [ラテン語の翻訳を書きません]。この整理によって特別に広い余白がえられて、そして同時に外国人のための辞典が利用可能となるでしょう。
3. 文法関係はどの程度の紙幅が必要ですか。可能なかぎり短くして、そしてもっとも簡単な略記法によって。
4. 厳格なアルファベットの配列。まさに想像された根源に基づくのではなくて。
5. かくしてまた語源も辞書に記載しませんでしょうか。私は中世高地ドイツ語の形式に賛成します、あるいは、中世高地ドイツ語の形式が欠けている場合には、古代高地ドイツ語の形式を辞書に入れることに賛成します。たいていの場合、派生語および合成語の由来は明らかにされています。

とはいえ、全ての言葉についてその由来を解説する義務はありません。若干の個別の事例において、[派生語および合成語の] 由来を解説するべきです。多くの読者はかかる解明をもとめ、そして解明を望んでいます。

Oct. 2021 ヤーコブ・グリムの言語学者カール・ラッハマン宛の手紙 (1838年8月24日－8月31日)

6. 正書法, それは気むずかしい問題点ですが, たしかにアルファベットの配列のために重要です。すべてを書き改める試みは命がけのことでしょう。私はしかし, とはいえここではまさに, もっとも都合のよい機会がとらえられて, あえていくつかの言葉を改善しようと試みることができるし, そしてそのことを貫徹することができるのです。

7. 意義と表現のための例証の注意深い選択。それが資料の豊かさと並んで, 作品全体のもっとも独自の長所を成すでしょう。

### 原 注

(1) かようにGraff グラフは, (Ahd. Sprachschatz 1, XXXVI参照。) Boethius ボエティウスの作品のNotker ノトカーによる翻訳を引用します。その翻訳本は, Piper ビーパー社による印刷頁363頁を占めています。[訳注1]参照。

### 訳 注

[1] (vgl. Ahd. Sprachschatz 1, XXXVI) とは, Eberhard Gottlieb Graffの著述したAlthochdeutscher Sprachschatz oder Wörterbuch der althochdeutschen Sprache 6 Bände (1835-43) という辞書の第一巻XXXVI頁, 参照。「呪われた」とグリムが言うように, ここでは「Bo. 5」という表示によって, 「363頁にものぼる」翻訳本の, 引用箇所を特定しがたい, ずさんな引用の仕方を厳しく指摘しています。

[2] Adelung, Johann Christoph (1732-1806) :

Grammatisch-kritisches Wörterbuch der hochdeutschen Mundart. 5 Bände. 1. Auf. Leipzig 1774-1786.

## 第十一節

作品は高地ドイツ語が可能としたところのもの全てを自己のなかに含むべきです。作品は, それが高地ドイツ語に300年にわたり, 詩人および有能な作家によって培われたところの, 刻印にしたがって含むべきです。

## 第十二節

ライマーとハウプトは証明の見込みを周知することを望んでいます。人に予約注文をしてもらいたいということであれば, 辞書の企画の紹介は必要なことでしょう。資料が揃うまえに, どのようにして辞書の一節を宣伝として与えるのか, そのことについては見通せていません。本は, それが刊行されるときには, 自己自身の力を発揮し, 友を収集しなければなりません。(S. 691.)

この計画の公的な評価がたぶん有効でしょう。とはいえこの評価は我々のあいだで, 我々の友のあいだで行われるのが, 望ましいでしょう。私には欠けてはならない歓喜と勤勉が問題です。いろいろな飾りといろいろな催事が進行の過程でちょうどよい時期に不意に起こります。

### 第十三節

ラテン語の詩(原注1)の出版と取り扱いについて、あなたは不満をもっています。校正者が私を見殺しにしたのです。私自身は迅速な校正において、たいていの場合には、余りにとり散らかし、そして余りに慌ただしくしていました。

新たに『ゲッティンゲン報知』(原注2)の広告において告示された誤植[訳注1]のほか、貴方はなお *Walth.* 1352列[artu]を *astu.* に[訳注2], *Rudl.* 3, 53列[*victi vexilloque*]を, *victi sub vexilloque.* に[訳注3], *Ecb.* 835列[*Consistit*]を, *Constitit.* に[訳注4]訂正してください。

マルヒュス *Malchus* という名前について、私は(マドック *Madoc* のときと同じく)ふたたび注意を払っていませんでした。私はその誤りを今や自身で見つけだしましたが、しかしあまりに遅く見つけだしたのです。(原注3)

*p.* 289[*vosaginis partes.*]を *vosaginae partes.* と(原注4)[*partibus ortus*]を *partibus orti* と読んで下さい。とはいえ[その誤りに対する批判には], たぶんよく防御することができるでしょう。[訳注5]

貴君の誠実な友

1838年8月31日

ヤーコプ・グリム

### 原注

- (1) Vgl. Grimm, Jacob; Schmeller, Johann Andreas (Herausgeber): *Lateinische Gedichte des X. und XI. Jh.*, Göttingen 1838. S. 676. Anm. 3.  
J. グリムと J. A. シュメラール『十世紀および十一世紀のラテン語の詩』676頁, 注3, 参照。
- (2) Jacob Grimm, *Kleinere Schriften* Band 5. Berlin, Ferdinand Dümmler, 1871. S. 286.  
J. グリム『小品集』第5巻, 286頁。
- (3) 同上書, 287頁, 参照。
- (4) *Ecbasis.* 第887列。  
*Ecbasis Cujusdam Captivi Per Tropologiam.* in: *Lateinische Gedichte des X. und XI. Jh.* Hrsg. von J. Grimm und A. Schmeller Neudruck der Ausgabe 1838, 1967 Amsterdam. 887.  
「中世ラテン語動物叙事詩『囚人の脱出』」丑田 弘忍 訳『中京大学教養論叢』第36巻第4号, 1996年, 参照。

### 訳注

- [1] “göttingische anzeigen” は, Göttingische Gelehrte Anzeigen『ゲッティンゲン学術報知』という雑誌です。J. グリムは, 自分の *Lateinische Gedichte des X. und XI. Jh.* の編集の過程で, いろいろな書き損じを出しました。この雑誌で, これらの書き損じを訂正しています。
- [2] *Walth.* 1352. *astu.* の解説:  
「ヴァルターリウス」(*Waltharius*), あるいは, 「ヴァルターの歌」(*Walthari-Lied*) は, 10世紀ごろに成立した英雄叙事詩。ゲルマンの英雄の功績を描いた1455行の六脚韻詩です。  
1838年に J. グリムが, 10以上の写本を参照して, ゲッティンゲンで校訂版を刊行しました。  
J. Grimm, *Lateinische Gedichte des Mittelalters*, Göttingen 1838. 第1352列, 参照。



Oct. 2021 ヤーコブ・グリムの言語学者カール・ラッハマン宛の手紙 (1838年8月24日－8月31日)

丑田 弘忍「中世のラテン語叙事詩“Waltharius”の翻訳並びに研究」(Ⅰ), (Ⅱ), (Ⅲ)『中京大学教養論叢』第13巻第2号, 1972年, 同第13巻第3号, 1972年, 同14巻第1号, 1973年, 参照。

[3] Rudl. 3, 53 victi sub vexilloque.の解説:

Ruodlieb. 3, 53 ルーオトリープ 11世紀半ば, 中世ラテン語によるドイツの騎士物語。またその主人公の騎士の名前。

グリムは, Ruodliebという歌の断片的な写本の, 三番目の, 第53列をつぎのように記しています。

Ipsement atque mei tibi debemus famularis, Ut bello victi sub vexilloque subacid

グリムは, 自分の本にはvicti vexilloqueと書いて, subを忘れています。その訂正のことをここでは記していません。

丑田 弘忍 訳「ルオドリエプ」(断篇Ⅰ-Ⅲ), 同(断篇Ⅳ-Ⅵ), 同(断篇Ⅶ-XⅧ), 『中京大学教養論叢』第19巻第1号, 1978年, 同第20巻第1号, 1979年, 同第22巻第1号, 1981年, 参照。

[4] Ecb. 835 Constitit. :

グリムは, Ecbasis (原注4参照) の第835列において Consistit [彼が止める] と書きましたが, 正しくは Constitit [彼が止めていた] です。

丑田 弘忍 訳「中世ラテン語動物叙事詩『囚人の脱出』」『中京大学教養論叢』第36巻第4号, 1996年, 参照。

[5] グリムは, ラテン語の歌の本Ecbasisの解説において, p. 289の vosaginae partes. ヴォザギナエ地方の(二格)を, vosaginisと間違えて書いています。その間違いについて, ここでは言及しています。

またEcbasisの第887列の partibus ortusは, partibus orti (原注4参照) と書くのが正しいのです。「とはいえその誤りに対する批判には, たぶんよく防御することができるでしょう。」「[というのは partibus ortus と partibus orti とのあいだには, ほとんど意味の違いがないからです。]

## 参考文献

翻訳にあたり, 参照した文献(邦文)を記します。

J. グリム「彼の免職について」稲福 日出夫 訳『沖縄法政研究』第8号, 2005年。

J. J. ルソー『言語起源論』増田 真 訳, 岩波文庫, 2018年。

J. G. ヘルダー『言語起源論』木村 直志 訳, 大修館書店, 1987年。

ヴィルヘルム・シュミット『総論 ドイツ語の歴史』西本 美彦 他訳, 朝日出版社, 2004年。

西川 正雄 編『ドイツ史研究入門』東京大学出版会, 1984年。

木村 靖二 編著『ドイツ史』新版, 世界各国史, 13, 山川出版社, 2001年。

高橋 健二『グリム兄弟・童話と生涯』小学館, 1984年。

ガブリエーレ・ザイツ『グリム兄弟』高木 昌史・高木 万里子 訳, 青土社, 1999年。

小澤 俊夫・田中 安男『グリム幻想紀行』求龍堂, 1994年。

千代田 寛「『ゲッチンゲン七教授追放事件』の史的考察－国家権力と大学－」(その一, 二, 三, 四), 『大学論集』第一, 二, 三, 四集, 広島大学 大学教育センター, 1973-76年。

東畑 隆介「ハノーファー王国の憲法紛争」(一, 二, 三), 『史学』第四十九巻第四号, 第五十巻記念号, 第五十三巻第二・三号, 慶應義塾大学, 三田史学会, 1980-83。

河上 倫逸『法の文化社会史』ミネルヴァ書房, 1989年。

(2021年7月16日掲載決定)